AMDA ジャーナル ー国際協力ー　2019 年春号　2019 年 4 月 25 日発行　□発行定日　年 4 回（1・4・7・10 月 各 25 日）□ 1995 年 11 月 27 日　第三種郵便物認可

AMDA 多様性の共存 ジャーナル

2019 年 4 月 25 日　VOL.42　第 289 号　定価 550 円
発行／AMDA　〒 700-0013　岡山市北区伊福町 3-31-1
TEL 086-252-7700　FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp
郵便振替：01250-2-40709　口座名：特定非営利活動法人アムダ

2019 年 春 号　春

救える命があればどこへでも

認定 特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
http://amda.or.jp/
認定 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
http://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
http://amda-imic.com/
AMDA 兵庫
http://amda-hyogo.com/

連載インタビュー「支える喜び」シリーズ 第 20 回
株式会社 山一観光　取締役相談役　小野　浩 様

AMDA を支えてくださっている支援者の皆様にインタビュー形式で様々なエピソードをお伺いしている「支える喜び」シリーズ。20 回目となる今回は「株式会社山一観光」（熊本県熊本市）の取締役相談役、小野浩様に AMDA 菅波理事長自ら熊本市の事務所でお話を伺いました。

菅波　小野様そして、山一観光の皆様が AMDA にご支援を始められた経緯を教えてください。

小野　平成 11 年 5 月から支援を行っており、もう 20 年近くになります。私は 2 歳の時に中国から引き揚げてきました。人間は一人で生まれ、一人で死んでいきます。どれだけ稼ぐかより、どのように生きたかという視点で人生を俯瞰（ふかん）した時、「人のために何ができるか」と考えるようになりました。その時に新聞で世界を相手にパートナーシップ構築に挑戦する菅波氏の姿に感動し、ご縁のあった岡山にある AMDA 本部を訪問しました。

菅波　岡山とのご縁とは？

小野　私が九州の雲仙の旅館で岡山の企業の役員旅行のお世話をしていた時、一人の役員の方から、九州にいるつもりかと聞かれ、私は都市で働きたいと伝えました。するとその場で東京の大手ホテルの社長に連絡され、就職がきまりました。その後、岡山プラザホテルの開業で岡山の地で働くようになりました。

右から 2 番目　取締役相談役　小野　浩 様

菅波　その後、熊本で旅行会社を設立されたのですね。

小野　仕事を手伝っていた旅行業界の会長がお亡くなりになり、その会社を買って欲しいとの依頼がありました。私を東京のホテルに紹介した方からも再三勧められました。「旅行業と思うな、普通のビジネスと思え」と。両親らから借金して 42 歳の時に一人でスタート、平成元年でした。

菅波　御社は、職員皆さんの給与から天引きして毎月、AMDA にご寄付くださっていますね。ご寄付は、カンボジアの HIV・AIDS 予防事業に使われています。

小野　以前から会社で寄付活動をしていましたが、手ごたえが欲しくて AMDA を訪ね「人の力になることの喜び」を見出すことができました。

菅波　熊本地震では大きな被害を受けられました。

小野　社屋の壁が落ちるなど業務は全てストップし、団体旅行は全てキャンセル。収入ゼロの危機を多くの方々に支えられ、1 年でほぼ回復しました。

菅波　AMDA への期待を聞かせてください。

小野　「救える命があればどこへでも」を理念とするＡＭＤＡの幅広い災害支援活動には、とても感心しています。支援がいち早く被災地に届くことを願っています。

菅波　来年は山一観光創立 50 周年を迎えられます。御社のご発展と小野様はじめ職員の皆様のご活躍とご健康をお祈りします。

シエン・リティ氏　AMDA カンボジア支部長

山一観光様には十二年以上に渡り、幣団体の活動に対する継続的なご支援を賜りました。頂いておりますご寄付は、私達の活動を維持していく上で非常に大きな意義を持っています。カンボジア国民を代表し、皆様方による長年のご協力、ごご厚情に対し御礼申し上げます。

（インタビュー内の敬称は省略させていただきました）

インドの旅　顛末記

2019年11月6日よりインド連邦の南に位置するケララ州から東のビハール州まで、飛行機と汽車を使って、17日間の旅をしました。インドは広い。所変われば品変わる。偽らざる実感です。最初にケララ州を訪問したのは、8月に100年ぶりに発生したといわれている大洪水後の被災地の視察と一緒に活動してくれたインドの人道支援団体へのお礼のためです。この団体はインドの津々浦々の村にまで支部があります。今後も組みたい気持ちです。

夜汽車で10時間。カルナタカ州ウドゥピー市にいるAMDAインド支部長のカマト医師と打ち合わせた後にマンガロール空港からビハール州の州都であるパトナ空港まで飛び、ブッダガヤまで8時間かけて自動車で行きました。途中は祭りのため赤、黄色など色とりどりの電球が家々に飾ってありました。インド文化圏では本当に数々のお祭りがあります。

ブッダガヤではロータリークラブと災害支援協定を結びました。ビハール州はインドで最も貧しく災害が多発する州です。近い将来にビハール州政府とも協定を結ぶことを考えています。ブッダガヤはお釈迦様が悟りを開かれた地で、世界遺産のマハーボーディ寺院を中心に世界の仏教国の寺院があります。ここにある宗教委員会には仏教国の災害時に各国の仏教寺院がAMDAと連携するように声明を出してもらえればと夢想をしています。

ブッダガヤロータリークラブと連携協定締結

ブッダガヤには貧困家庭の子ども達の教育を目的とする財団がたくさんあります。岡山県の天理教道竹分教会からはるばると海路で輸送された衣類をこれらの財団の子ども達に配布して大変喜ばれました。コルカッタ港税関では2か月間超えのストップをかけられましたが、お陰様で本当に善意の方々に出会うことができました。一生もんの人宝です。

最後に、AMDAピースクリニックは皆様のご支援により貧しい村々の母と子の健康推進の活動を続けることができています。この紙面を借りて深く感謝を申し上げます。

（理事長　菅波　茂）

インド・ビハール州　ブッダガヤでの井戸建設

ビハール州の農村部では月約470円で暮らす貧困層が33.7％と、全国平均（21.9％）よりも高く、多くの村では農業や日雇い労働で生計を立てています。AMDAが井戸を建設したブッダガヤ地区マティヤニ村ダンプールでも同じ状況です。

村に唯一ある公共井戸は水深が浅いため、乾季には水が枯れます。暑い時には50度近くなる中、村人は近隣の井戸に水汲みに行っていました。大変不便な生活を送っていたものの、経済的理由から新たな井戸を建設できずにいました。

株式会社新通故会長ご令室 樋口様より、株式会社新通エスピー青山様を通じて「インドの恵まれない人にきれいな水を届けたい」という申し出により、AMDAは必要とする村に井戸を建設しました。村のリーダーは、「井戸から小麦畑に水を引いて農業用水として使用し、生活用水として飲料水、洗濯、シャワー、皿洗い、家畜の飲み水などにも使っています。ご支援ありがとうございました。」と話しました。

井戸水で洗濯物をする村人

（インド担当　岩尾　智子）

大使館、総領事館、関連施設への有機米の贈呈及び活動報告実施

AMDAは世界32の国と地域の支部との連携の下、国内外で支援活動を実施していますが、国外でより良い活動を実施するためには、対象国からの深い理解と協力が不可欠です。AMDAはこれまでにご協力いただいた感謝と今後のさらなる相互扶助を実現するため、22カ所の国・地域の大使館、総領事館、関連施設に伺い、岡山県真庭郡新庄村の有機米の贈呈、及び活動の報告を行いました。

インド、カンボジア、スリランカ、ネパール、バングラデシュ、ホンジュラス、モンゴル、ルワンダの各大使館では、大使閣下に直接お会いし活動の報告を行いました。スリランカ大使館には岡山県赤磐市から友實市長、市職員の方々と一緒に訪問し、緊急支援活動報告に加えて、赤磐市の中学生も参加した2018年8月の「AMDAスリランカ平和構築プログラム」について大使閣下に報告、スリランカでのAMDAの活動に関して「大使館として何かお手伝いしたい」とおっしゃっていただきました。パキスタン大使館・インドネシア大使館には、AMDAとフードプログラムを実施してきた新庄村から副村長、村議会議員、村職員の方々と一緒に訪問し、AMDAの活動報告と共に、インドネシアでも実施しているフードプログラムについても話題にしました。　（プロジェクトオフィサー　神倉　裕太郎）

スリランカ大使館訪問の様子（左から2番目　赤磐市友實市長）

新庄村とインドネシア大使館を訪問

バングラデシュ、テンガマラ婦人会とバングラデシュ・ダウン症協会と三者協定締結

2019年1月7日、AMDAはバングラデシュ現地NGOであるテンガマラ婦人会（通称TMSS）、バングラデシュ・ダウン症協会と三者協定を締結しました。これは各団体が相互扶助の精神に則り、緊急防災、災害管理、高齢者ケア、ダウン症に対する啓蒙活動の分野で協力するものです。TMSSは、バングラデシュ北西部ボグラ県に本拠地を置くNGOで女性の能力開発、貧困撲滅、自己雇用努力を目的に設立され、貧困層に福祉と開発サービスを提供しています。バングラデシュ全土に800カ所の支所を有しており、洪水多発国であるバングラデシュでの今後の災害支援においても、密な連携が期待されます。　（バングラデシュ担当　橋本　千明）

コヤマダインターナショナルファンデーション（国際キフ）と協力協定

国際キフは、2008年に小山田真様（岡山出身）が、アメリカ、カリフォルニア州ロサンゼルスに、全米国際姉妹都市協会や国際青年会議所のなどとの連携のもと、世界平和、相互理解、持続可能な発展を促進するために設立され、昨年12月にAMDAと協力協定を締結しました。小山田会長は、「菅波先生には子供の頃からお世話になっております。各国に広がるキフ の提携団体との連携を図り、岡山から世界へ、AMDAとともに新たなる挑戦を楽しみにしています！」と今回の協定に大きな期待を寄せました。

（理事　難波　妙）

AMAT 訓練に鍼灸師が調整員として参加

2019 年 1 月 19 日・20 日、平成 30 年度全日本病院協会・全日本病院協会徳島県支部・ホウエツ病院主催の救急災害訓練が徳島県・徳島県医師会・美馬市の共催、徳島県医師会・警察・消防・自衛隊等の協力によりホウエツ病院・美馬市役所・特別養護老人ホーム家康等を会場に実施されました。

全日本病院協会は、災害時医療支援班（AMAT）を持ち、災害時の急性期から亜急性期において災害時要援護者にも配慮した医療救護活動を実施できる医療チームとして協会会員病院支援・災害時要援護者支援・患者の病院間搬送を担います。

AMDA からは「AMDA 災害鍼灸チーム」より 2 名（今井賢治氏・山口大輔氏）に調整員として参加いただきました。本部からは、看護師 1 名・調整員 3 名・現地調整員 1 名が参加しました。当日 AMDA は、福祉避難所として指定されている「特別養護老人ホーム家康」にて救護室の立上げ及び施設内巡回を担当し、緊急医療が必要な方をホウエツ病院へ搬送するという訓練を行いました。

参加者からは「AMDA 本部や現地の対策本部等との連絡のタイミング・方法が分からず、できていない部分があった」「今回のような訓練はとても有意義だが、事前に何をするか（調整員の役割）を共有する研修会・ワークショップなどの機会を設けると、より充実した訓練になるのでは」との感想がありました。

AMDA では、今後調整員の役割・業務内容についてワークショップ等を行う必要性を強く感じました。

（元赤磐市出向職員　三宅　孝士）

さめじま病院、諏訪中央病院と連携協定

AMDA は、さめじま病院（佐賀県佐賀市富士町小副川、鮫島隆晃院長）と、長野県の茅野市、諏訪市、原村で組織する組合立諏訪中央病院（茅野市玉川、吉澤徹病院長）と大規模災害に備えた連携協力協定をそれぞれ締結しました。

諏訪中央病院との協定式の様子

この協定は 2 病院ともに、被災者への緊急人道支援の円滑な運営が目的。南海トラフ巨大地震など災害が発生した時は、AMDA からの連絡を受けて徳島、高知県に緊急医療チームを派遣する、医療チームは原則として医師、看護師、調整員の 3 人で 1 チームを構成する、などとなっています。

さめじま病院とは 2019 年 2 月 12 日、諏訪中央病院とは同 14 日に協定書に締結しました。

諏訪中央病院とは東日本大震災支援活動にもご協力いただいており、AMDA が呼び掛けて締結が実現しました。（広報担当参与　今井　康人）

宝塚医療大学と協力協定締結

3 月 25 日、兵庫県宝塚市にある宝塚医療大学と連携協力協定を締結しました。相互扶助の理念のもと、災害支援活動、アジアの伝統医学との交流、人材育成に関して双方が協力し合うことを目的としています。

本協定は、同大学鍼灸学科教授の北小路博司先生が、AMDA の実施する西日本豪雨災害被災者緊急支援活動にご参加いただいたことがきっかけで実現しました。

岸野雅方学長は、過去に阪神淡路大震災でも支援活動に従事されており、「災害支援活動に参加できる機会があれば、是非とも協力したい」と語られ、北小路先生からは AMDA 災害鍼灸活動へ今後もお力添え下さると心強いお言葉を頂きました。　（プロジェクトオフィサー　神倉　裕太郎）

連携協力に関する協定　締結式
宝塚医療大学 ・ 特定非営利活動法人ＡＭＤＡ

岡山で初の日越国際シンポジウム

「ベトナム人就労者の健全な受け入れを目指して」をテーマにした「第1回日越国際シンポジウム」（日越国際シンポジウム委員会・一般財団法人国際医療貢献プラットフォーム主催、総社市・AMDA共催）が2019年2月20日、岡山市北区のホテルで開かれました。

国際医療貢献プラットフォームの菅波茂代表理事（AMDA理事長）が今後の取り組みとして、“安心”をキーワードとした「岡山・ベトナム健康増進コミュニティー形成推進プログラム」を提案。世話人会を発足させ、代表にアイ・エイチ・ディ協同組合の小林眞弘代表理事を満場一致で選出しました。

同シンポジウムは、駐日ベトナム社会主義共和国特命全権大使のヴー ホン ナム閣下をはじめ、両国の医療、行政、教育、団体・企業関係者やベトナム人技能実習生ら213人が出席。各界の代表がそれぞれの立場から“相互信頼”の構築を目指し意見を発表、質疑応答を行いました。

（広報担当参与　今井　康人）

「AMDAこども食堂支援プラットフォーム」設立1年半

子どもに低額または無料で温かい食事を提供する「こども食堂」。岡山県内で約40カ所と推定される子どもの“居場所”を支援しようとAMDAは2017年12月23日、産官学民でつくる「こども食堂支援プラットフォーム」を設立、食糧支援や社会体験の場の提供などを続けてきました。企業などからのご寄付や学生を中心としたボランティアら多くの方の支えが励みとなっています。この1年半の取り組みを振り返ります。　（広報担当参与　今井　康人）

お年玉は弘前産リンゴ

岡山ハーモニーライオンズクラブ（岡山市北区駅前町、有本みどり会長）より青森県の弘前リンゴの贈呈を受け、AMDAこども食堂支援プラットフォームは2019年1月17、18日、岡山県内の「こども食堂」14団体に配りました。

子どもたちは「リンゴは大好き」「丸かじりで食べた」と大喜び。お礼の手紙や絵を同ライオンズクラブに届けました。同クラブから「子どもが何か喜ぶことがしたい」とAMDAに申し入れがあり、こども食堂のスタッフの意見を聞いて決めました。

今回の贈呈は、同クラブは弘前市の「ふるさと納税」を活用し、返礼品として受け取った糖度14度以上の高級リンゴ20箱（1箱10個入り）を配布したものです。

1月9日リンゴ贈呈式の様子

お米を年4回配布

AMDAは3、6、9、12月に「こども食堂」へお米の希望数量を支援させて頂いています。

こども食堂のスタッフの方々は「経費のやりくりが大変。主食の支援はありがたい」「こどもがご飯がおいしいとお代わりする姿を見て、私の方が嬉しくなります」と話しておられました。

イチゴ狩りに歓声

2019年3月26日、岡山市東区西大寺門前の岡山フルーツ農園で開かれたイチゴ狩り農業体験。参加したのは、こども食堂の5団体28人（子ども17人、保護者11人）。同農園の高原弘雅社長からイチゴの栽培法や摘み方、食べ方などの説明を受けた後、子どもたちは舌鼓を打っていました。

楽しく視野を広めることで、将来を担う子どもの健全育成を目指すのが狙い。AMDAとしては初めての試みです。

学生ボランティアとして川崎医療福祉大学と岡山県立大学から計12人も参加しました。高原社長から農業への熱意や楽しさを話して頂きました。総合ビル管理業「研美社」（岡山市北区新屋敷町）の油谷直幸代表取締役会長からは小型バスを提供して頂きました。

子どもたちは「お兄さん、お姉さんに優しくしてもらい仲良くなれた」「友だちとイチゴの食べ比べをして腹いっぱいになった」―と笑顔を見せていました。

イチゴ狩りを楽しむ親子

私たちは東北を忘れない

東日本大震災から８年

東日本大震災から2019年３月11日で８年の年月が経ち、９年目に入りました。岩手県大槌町では、インフラ整備が進み３月には三陸鉄道も全線で運行を再開しました。避難所から仮設住宅そして自宅再建、または復興住宅へと３回目の引っ越しが続いています。

誰もが笑顔で暮らせる地域に

大槌健康サポートセンターの木工教室の様子

仙台夜回りグループによるホームレス支援の炊き出し

AMDAは震災当初から東北への支援を続けています。路上生活者に公園で食事提供している仙台市の夜回りグループに岡山産のお米を送っています。

AMDA大槌健康サポートセンターは、岩手県大槌町で鍼灸による健康の促進とコミュニティ再生の場として教室事業を実施中です。同じ町内で事業を委託している一般社団法人「Tsubomi」は震災による人口減少の中での子育て事業を実施し、子育てしやすい環境づくりを目指しています。

「命があれば何とかなる」―。2019年２月、AMDAが丸亀市で開いた被災地間交流フォーラムで、東北の被災者の方が述べた言葉です。家族や自宅、仕事を一瞬にして失い、絶望感と孤独、深い悲しみを抱えながらも、歯を食い縛って前へ進もうとする人たち。私たちはこの言葉をどう受け止め、どんな返事をしたら良いのでしょうか。

「東北を決して忘れません」―。私たちは微力ながらも地域に寄り添い、メッセージを送り続けることで、被災者の“心の傷”を少しでも癒せることが出来たらと願っています。

また、南海トラフ災害に備え、東日本大震災当時の経験を四国の自治体、医療機関による防災、災害対応の取り組みに活かしていきます。

（広報担当参与　今井　康人）

熊本地震から３年

益城町と連携協力協定

益城町とアムダとの「大規模災害時における連携協力に関する協定」締結式

2016年４月14日、熊本県熊本地方を震源とする震度７の地震が発生、大きな被害を及ぼしました。あれから３年目の2019年２月12日、AMDAは被災地の熊本県益城町と大規模災害時の連携協力協定を締結しました。

協定によると、益城町で災害が発生した場合、同町はAMDAに支援を要請。他の自治体で同様の災害が発生し同町が支援を行う場合はAMDAに協力を求め、連携して支援活動を行うとしています。

締結式では、AMDAが救護所を開設した益城町の広安小学校の震災当時の田中元校長（写真：右から２人目）、現在の金垣裕至校長（写真：右から１人目）の同席の下、西村博則町長（写真：左から２人目）とAMDA理事長の菅波茂が協定書に署名しました。

西村博則町長は、熊本地震の際のAMDAの緊急派遣について「大変心強かった。町職員の心身の健康にも配慮してくださり、無料で鍼治療もして頂いた」とお礼を述べました。

AMDA理事長の菅波茂は西日本豪雨の際、益城町が岡山県総社市を支援したことに触れ、「自治体の相互支援はAMDAの活動理念の“相互扶助”を具現化したものであり、こうした動きが全国でも広がることを願っています」と話しました。

益城町では今も仮設住宅で約4,000人の方が不自由な生活を送られています。このため、同町では新しい住宅の建設や災害公営住宅の整備など、被災された方々の生活再建を第一に取り組んでいます。

AMDAが熊本地震の際に派遣した医師、看護師、薬剤師、鍼灸師、調整員らは127人です。

（広報担当参与　今井　康人）

西日本豪雨、ぶどうの家と「相互扶助」を実現

2018年7月7日、岡山県倉敷市真備町の大半の住宅や商業施設が水没。真備町内唯一の小規模多機能施設ぶどうの家真備の利用者は、町内の小学校横の公民館分館を避難所として10月末まで4か月を過ごし、その後仮設住居に移られていました。一日も早く元の事業所へ戻りたいと職員一丸となって取り組まれ、2019年3月2日に新ぶどうの家真備が完成しました。

今回の経験から、どんな状況や環境でも小規模多機能型居宅介護はできると実感したそうです。暮らしや生活を支える専門職として高齢者の自立支援が基本であり、今回の災害に対してもそれは変わらず、たとえ年齢を重ねても避難者でも、できることは自分たちで行っていました。被災者である高齢者も避難所での生活であっても次々にできることが増えていくのが嬉しかったそうです。現在は、縫い物作業などで地域の方も含めAMDAの活動にご協力頂いています。

（プロジェクトオフィサー　橋本　千明）

インドネシア津波被災者緊急支援活動に参加して

2018年12月22日にインドネシアのジャワ島及びスマトラ島にて津波が起き、400人以上の方が犠牲になりました。AMDAインドネシア支部は12月25日にジャワ島バンテン州にて支援を開始し、、私は27日からAMDAインドネシアチームに調整員として合流、2019年1月1日まで現地で活動を行いました。津波被害を直接受けなかった地域でも、日本でいうシャッター街のように商店はほとんど閉まっていて食べ物が手に入りにくい状況であったため、食料支援も合わせて実施し、計995人に物資支援、89人に医療支援を行いました。

避難所等での聴取より、AMDAチームの医師が被災者の、特に子供たちの精神面を心配していました。その中で「被災地に笑顔を届ける」という目的で他団体や避難所の方々と協力し、ただ物資を配るだけでなくゲームの景品として楽しみながら配るなど工夫を凝らして活動を行いました。災害が非常に多いインドネシアですが、色々な地域から来る支援者・団体、地元の方も一緒になって子供たちに笑顔を届けようとする様子は、とても心強いものでした。子供たちが笑うとお母さんや周りの大人たちも笑顔を見せて、被災地ではあるが笑顔が広がっている様子はこちらも見ていて嬉しくなりました。

被災者の血圧を測る
AMDAインドネシア医師

（プロジェクトオフィサー　神倉　裕太郎）

スリランカ洪水被災者支援活動

発達した低気圧の影響で2018年12月19日から降り続いた大雨により、同月21日から22日にかけてスリランカ北部州にある5県で洪水が発生しました。死者2人、被災者は約12万人に上り、最大39か所の避難所に、多い時で約1万人が避難しました。

スリランカ支部の要請を受け、AMDAは日本から看護師1人を現地に派遣。現地協力団体であるセント・ジョン救急サービス・スリランカと一緒に、先遣隊のニーズ調査情報をもとに購入した蚊帳、学用品、救急箱などの支援物資をキリノッチ県で配布。その後、AMDA単独で地元保健所と協力して被災者健康相談などの支援活動を継続しました。

子ども達に学用品を手渡す山崎看護師

活動に参加した山崎秀明看護師
（AMDA緊急救援ネットワーク登録看護師）より

今回、特に印象的だったのは学用品の配布です。靴に関しては「どこに」「どの大きさ」の「男児用か女児用」が「いくつ足りないか」と具体的なニーズを把握した上で、まさに靴を必要としている児童に配布できました。さらに、被災地域ではバッグや弁当箱、水筒、ノートを含む学用品が浸水して使えなくなりました。学校が年末休み明けの授業開始日の前日にそれらを子供達に配布できたこともあり、被災した子供達も被災していない子達と同じく通学することができました。つまり、適切なタイミングで適切な場所に適切な物を支援できました。配布したスクールバックを大切そうに抱えて嬉しそうにしている姿を見たときはとても嬉しくやりがいを感じました。

（GPSP推進戦略局担当部長　岩尾　智子）

ネパール内視鏡研修

AMDA 理事　佐藤 拓史　医師

ネパール南東にあるインドの国境近くのジャパ郡、ダマック市のAMDAダマック病院で地元医師を対象に内視鏡技術研修を2月24日から3月1日まで実施しました。昨年に引き続き2回目の研修となりました。研修を受けた医師の一人であるディワス医師とは、2015年4月に発生したネパール中部地震で甚大な被害を受けたシンドゥパルチョック郡での緊急医療支援活動を通して知り合いました。ディワス医師は岡山県ローカルｔｏローカル事業（海外技術研修員）の制度により2016年8月から岡山済生会総合病院で3ヶ月間の内視鏡研修を修了しています。

今回は上部消化管内視鏡検査技術のレベルアップを目指した研修です。1年ぶりに見たディワス医師の内視鏡技術は驚くほど向上しており、彼の内視鏡に対する真摯な姿勢とその成果に深く感銘をうけました。ディワス医師が「日本から自分の恩師が来られる」と多くの患者さんに伝えていたため、5日間の研修期間中に19歳から77歳までの73名の多くの患者さんが内視鏡検査、治療を受けられました。

佐藤医師（右から2人目）と研修を受けたネパール人医師と看護師

内視鏡研修の様子

ダマック市ではまだ内視鏡検査や治療が普及していません。例えば食道静脈瘤破裂の患者さんの内視鏡治療はこの地域では行えず国境を越えてインドにまで搬送しています。緊急を要する治療が必要な患者さんが搬送中に命を落とす事もあります。このような現状の中で治療すれば助かる命をどうにかしたいと考える地元医師達の要請に応えるため、AMDAのネパール内視鏡研修がスタートしました。

今回のセミナーを通じて、技術を伝え残していくミッションは次の世代の医師達に広く受け継がれていくという重要な意味を持つと痛感しています。未来へつながっていくミッションです。ネパールの医師達が日本の医療技術を学んで自立し、自力でより多くの治療ができるようになろうとする姿勢は、私の医師を志した原点を思い出させてくれました。日本で当たり前のように行われている内視鏡検査や治療でネパールでも多くの命が救われるため、ネパール内視鏡研修を継続していくことが重要であると強く感じています。

AMDAネパールよりインド洪水支援活動派遣者に感謝状

AMDAは2018年8月にインド連邦南部ケララ州で起こった洪水に対して、多国籍医師団を結成し緊急医療支援活動を実施しました。AMDAネパール支部からも医師2名と調整員1名が多国籍医師団に参加しました。その後の2019年1月16日、AMDAネパール支部の事務所にて菅波代表が直接参加者3名に感謝状を手渡しました。参加者からは「今後も積極的にAMDAの緊急救援活動に参加したい」と熱いお言葉をいただきました。

（ネパール担当　アルチャナ・ジョシ）

第四期　ネパール地震復興障がい者支援

理学療法士　西嶋　望（ネパール在住）

Ⅰ：第四期の特徴

2018年6月より10か月間実施しました。目標は「障がいがあっても住みよい街づくりの基礎を築く事」。パートナーの障がい者団体「自立生活センターラリトプール（以下ILCL）」が将来も社会参加を促進する事を目指し「行政機関とILCLとの連携の構築」のためワークショップを取り入れました。更にILCLの人材育成プログラムも加えました。そして自立生活促進に自立生活プログラム（以下ILP）も導入しました。

Ⅱ：活動概要

対象は延べ625名。1）訪問活動（カトマンズ盆地内訪問リハビリ＆訪問ピアカウンセリング）＝46名。2）モバイルキャンプ（カトマンズ盆地外訪問リハビリ＆訪問ピアカウンセリング）＝48名。3）IDOBATA GAFU Program=242名。4）ILP＝7名。5）シェアリング・ワークショップ＝49名。6）介助者トレーニング＝5名。7）ピアカウンセリング・ワークショップ＝5名。8）自立生活カンファレンス＝75名。9)物資支援＝148名でした。

Ⅲ：総括

今期も訪問活動やモバイルキャンプは多くのニーズがありました。「寝たきり」「閉じこもり」には体の障がいや環境の問題もありますが精神的な落ち込みが大きく、ピアカウンセリングは重要でした。寝たきり予防や介助法を指導しました。訪問後は前向きな発言や笑顔が見られました。自立生活に不安が残る方にILPを実施し、ILCL事務所で自立生活の教育、介助者と生活体験、外出訓練を実施しました。対象の障がい者から「生きる自信がついた」など喜びの声がありました。

重度障がい者による発表を聞く参加者

シェアリングワークショップでAMDAがプレゼンテーション

物資支援は自立生活にむけ訪問して実施し、物資は、移動補助具・生活補助用具・リハビリ用具・衛生用品等をニーズに合わせ提供しました。

介助者トレーニングとピアカウンセリングワークショップは介助者とピアカウンセラーの育成として実施し、ILPで介助とピアカウンセリングに受講者は尽力下さいました。

シェアリングワークショップはラリトプール市役所内で実施。49名参加（同市副市長、女性子供課職員、地区のリーダー等）。4名の障がい者による体験談と、AMDAより「障がい者支援活動」や「日本の障がい者制度」について講義しました。参加者から「障がい者の声を初めて聴いた」「このようなワークショップをもっとしてほしい」との声が聞かれました。

自立生活カンファレンスはラリトプール市内で開催。75名参加（女性子供高齢者省大臣と同省担当官、ラリトプール市長と女性子供課主任、障がい者多数）。AMDAはバリアフリー公営バスを用意し、障がい者の参加をサポートしました。ある重度障害者は「初めて家を出て来た」と述べました。プレゼンテーションは、行政関係者、重度障害者、そしてAMDAより行いました。最後に重度障害者の社会参加のための提言書をまとめました。AMDAはこの提言書を各障がい者関連機関にアピールする為アドボカシープログラムのサポートをしました。

今期はAMDAと「おかやま発国際貢献推進事業」の協力で実施されました。皆様のご支援に謝辞を申し上げます。

AMDA副理事長就任のごあいさつ

発足以来AMDAの理事として関与してきましたが、この度AMDAの副理事長をお受けすることになりました。

AMDAが展開する国内外の活動を支援して下さっている方々のお気持ちを最大限に生かせるように、理事長及び本部スタッフの皆をより一層サポートしてまいりたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。　（副理事長　菅波　知子）

ストリートチャイルド支援実行委員会からご寄付

実行委員会星島淑子代表と AMDA ボランティアセンター名誉センター長

2019 年 2 月 24 日（日）西川アイプラザで開催された第 18 回チャリティーコンサートで標記実行委員会から AMDA の活動にと寄付金の贈呈をいただきました。この委員会の代表者である星島淑子さんは、世界の悲惨な状況下にある子どもたちへの支援と世界平和を願って 2002 年から毎年コンサートを主催してきました。今年は「マダガスカルの子供たちに未来と夢を」と謳って、楽器演奏はもとより歌あり踊りありという多種多彩な楽しいひと時を過ごしました。AMDA はこのコンサート収入の一部を賜ったわけではありますが、毎年継続してのご厚意には言葉に尽きせぬ感謝のほかありません。星島代表は第 1 回開催時に菅波 AMDA 理事長から、「このような意義あるコンサートは毎年続けたら」と勧められて遂に 18 回目になりましたと感慨深げに語っておられました。

（AMDA ボランティアセンター名誉センター長　小池　彰和）

倉敷アカデミックウインズがチャリティーアンサンブルを開催

倉敷アカデミックウインズの「第 27 回定期演奏会」が 2019 年 3 月 3 日、倉敷市本町の市民会館大ホールで開かれ、楽団メンバーが AMDA への募金活動をしてくださいました。

会場では AMDA の活動写真パネル 11 枚が掲示され、楽団員らが募金箱を手に来場者に協力を呼び掛けて下さいました。

寄付をしてくださった団員の母親という 60 代女性は「AMDA はすばらしい活動に取り組んでおられる。少しでもお役に立てたら」と笑顔。

毎回、演奏会に来るという 50 代女性からは「いつも AMDA に寄付をしている。頑張ってね」と励ましの言葉を頂きました。

演奏会は、午後 1 時の開場前には 100 人を超す家族連れらが行列をつくる盛況ぶり。団員 58 人の吹奏楽団が組曲「シバの女王ベルギス」など 13 曲を披露。約 800 人が熱心に聴き入っていました。

（広報担当参与　今井　康人）

岡山県洋蘭展で AMDA が展示コーナー

「咲かせよう美しい花、みんなの夢～ AMDA とともに」をテーマにした岡山県洋蘭協会主催の「第 62 回洋蘭展」（AMDA 共催）が 2019 年 2 月 1 ～ 3 日、総社市西郡の農マル園芸吉備路農園で開かれ、AMDA は県洋蘭協会のご厚意で展示コーナーを開設しました。

AMDA の展示は今年で 23 回目となります。

会場にはピンクやオレンジ、黄色など会員 19 人の力作 136 点が並び、華やいだ雰囲気。洋蘭の栽培相談コーナーをはじめ、世界の珍しいランや肥料など園芸資材も並び、家族連れらが次々と訪れて一足早い春の訪れを感じていました。

AMDA コーナーでは西日本豪雨の支援活動などを紹介するパネル 9 枚を掲示。東日本大震災で被害を受けた東北地方の海産物などを AMDA 玉野クラブが委託販売しました。

県洋蘭協会の会員の方々から提供された作品の即売チャリティーコーナーも設けられ、売上金は毎年 AMDA に寄付して頂いています。　（広報担当参与　今井　康人）

相互扶助：ジャパン - テキサス、リーダーシップシンポジウムにて相互扶助を強調

3月27日、SCI(全米国際姉妹都市協会)が主催したアメリカ、テキサス州で行われたジャパン―テキサスリーダーシップシンポジウムは、日米間において、過去60年に渡り育まれた441組の姉妹都市による市民外交ネットワークの持続的連携と活性化を目指して開催されました。総勢250名の参加者と共に、文化、教育、経済、投資など、様々な内容の議論が展開されました。今回AMDAは、昨年協力協定を締結したコヤマダインターナショナルファンデーションからの招待を受け、AMDA理事の難波妙が参加しました。

アメリカ合衆国副大統領夫人による基調講演の後に行われたパネルディスカッションのパネラーとして、AMDAは、災害時に実現した相互扶助について発言を求められました。その実例として、1995年サハリン地震被災者支援活動に向かった時、ロシア政府から一旦受け入れを拒否されたものの、AMDAの活動は4か月前に発災した阪神淡路大震災にサハリンから支援を受けたお礼が目的であると力説すると、ロシア政府が快諾した例と、昨年夏の西日本豪雨災害の際に岡山県総

社市と他の自治体の対口支援の例を紹介しました。災害支援活動を支えた相互扶助の理念に会場からは、多くの賛同をいただきました。　（理事　難波　妙）

インターン紹介

佐藤　未来

AMDAをインターン先として選んだ理由は、途上国の公衆衛生分野の協力に関心があったことと、地元岡山から社会に還元できることはないかという想いからでした。期間は2カ月と短かったですが、会計や大使館に提出する書類作成、国際シンポジウムの司会など、幅広く多くのことに挑戦させていただきました。

初めてAMDAのオフィスを訪れたのは、ちょうどインドネシア津波災害の緊急支援活動にAMDAの調整員が派遣される時でした。本当に支援を必要としている人たちに迅速に支援を届けるためには、問題の原因は何であるのか、先で何が必要なのかを想定し、関わる人たちを巻き込みながら、細やかな調整を進めることであると学ぶことができました。

4月から政府系国際協力機関で働いていますが、今後AMDAと協働する機会があることを願い、日々精進していきたいと思います。短い間でしたが、本当にありがとうございました。

フロムビゼンによる　備前焼作家による東日本・西日本復興支援チャリティー開催

平成23年からスタートした東日本大震災復興支援チャリティー(フロムビゼン)のチャリティー展が毎年継続され今年は9回目となりました。今年のチャリティー展は3月9日(土)、岡山一番街コンコース広場で開催され若手備前作家のご有志40名の方たちが自ら店頭に立たれ、およそ400点の作品を持ち寄り展示販売されました。

売上をAMDAと子どもシェルターモモへそのままご寄付としていただきました。今年は東日本大震災に加え西日本豪雨災害の復興支援として取り組まれAMDAはそれぞれのパネルを用意し皆様にAMDAの活動を紹介しました。

（AMDAボランティアセンター事務局長　竹谷　和子）

AMDAジャーナル ダイジェスト休刊のお知らせ

当法人が発刊しております「AMDAジャーナルダイジェスト」は、活動報告誌として年2回、ご支援者の皆様に長い間、ご愛読されてまいりました。

メディアの多様化に伴い、誠に勝手ながらダイジェストの発行は2019年4月以降、休刊させて頂くことになりました。ダイジェストのみの読者の方には、夏と冬に発行のジャーナルをお送りさせて頂きます。ご理解賜りますようお願い申し上げます。